

中学校 国語

中学校国語科において、立場や考えの違いを踏まえて話す能力を
育成するための指導法の研究
ープレゼンテーション資料の作成における判断規準にのっとった工夫と交流ー

義務教育課 研究員 平 館 祐 一

要 旨

本研究では、中学校国語科の「話すこと・聞くこと」領域の学習において、プレゼンテーションの資料を作成する学習活動を通して、立場や考えの違いを踏まえて話す能力を育成しようとした。「あもじここ」という判断規準を設定し、その内容と意義を理解させ、「あもじここ」にのっとり資料を個人で工夫した上で、グループで交流をしながら資料を作成させた。この指導の工夫は、立場や考えの違いを踏まえて話す能力の育成に有効であった。

キーワード：中学校 国語 話す能力 プレゼンテーション 判断規準 工夫・交流

I 主題設定の理由

現在、生徒は様々な機会に、様々な内容のプレゼンテーションをしている。しかし、自分の今までの経験では、プレゼンテーションの場が対外的なものになるほど、発表原稿や資料には指導者の一方的な手直しが多く行われ、発表は、指名された生徒がそれをいかに流暢に話すかという、できる生徒による朗読活動に終わってしまうことが多い。それは、今までの自分の指導では、生徒が立場や考えの違いを踏まえて話す能力を身に付けることができていないことによるものである。

今後は、各教科や総合的な学習の時間や、行事等でプレゼンテーションが行われる機会が増え、その重要性がより高まる。さらに中学校卒業後の社会生活で、プレゼンテーションを求められる状況を迎える生徒も多くなっていくことが予想される。

よって、プレゼンテーションをするために必要な力を生徒に確実に身に付けさせることは、実生活で生きてはたらく力を身に付けることであり、各教科等の学習の基本となる国語科の喫緊の課題である。そこで、生徒が分かりやすく、印象的で、説得力のあるプレゼンテーションを行うための資料を自身の手で作作り、立場や考えの違いを踏まえて話す能力を身に付ける指導法を模索したいと考え、本研究主題を設定した。

II 研究目標

プレゼンテーションの学習における資料作成の場面で、簡潔な判断規準を理解させ、それにのっとった工夫と交流を繰り返すことが、立場や考えの違いを踏まえて話す能力を育成するために、有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

中学校国語科のプレゼンテーションの学習における資料作成の場面で、次のような指導法の工夫を順に講じることで、立場や考えの違いを踏まえて話す能力を育成することができるであろう。

- ・二つのプレゼンテーションモデルを提示し、比較させる。
- ・簡潔な判断規準を設定し、重点的に指導する。
- ・スライドカード法によって交流させる。

IV 研究の実際とその考察

1 プレゼンテーションの学習を研究するに当たっての確認事項

(1) 中学校国語の「話すこと・聞くこと」領域におけるプレゼンテーションの学習の位置付け

プレゼンテーションの学習は、中学校第2学年の言語活動であり、説明的活動としては集大成的な位置付けの活動である。よって、この学習では、小学校を含めたこれまでの「話すこと・聞くこと」の言語活動によって培われた様々な話す力を、相手と目的に応じて組み合わせて、使いこなすことが求められている。また、プレゼンテーションの学習は一方の方向的説明的活動ではあるが、明確な相手意識をもって資料作成等の準備をすることが求められ、双方向の「話すこと・聞くこと」の言語活動にも生かされていくものである。

(2) プレゼンテーションの目的

文献を渉猟してみたが、プレゼンテーションについて定まった定義はない。堀(2002)は、「教室プレゼンテーション」という語を造り、「一定の時間内で特定の聴衆に対し、わかりやすく楽しく、説明したり説得したりするための総合的な演出技法」と定義し、「〈教室プレゼンテーション〉の目的は「行動意欲の喚起」である」と述べている。本研究では、堀の考えを参考に、生徒により明確なねらいをもたせて授業をするため、「相手に目的とする行動意欲を喚起・向上させるために行う」ことを目的とする。なお行動意欲という語には理解、納得等も含むものとする。

(3) 中学生に求められる話す力について

動作を含めた話し方は、効果的なプレゼンテーションをするためには重要な要素の一つであり、小学校以来、様々な言語活動を通して学習されてきているが、中学生に求められる話す力は主に構成や展開を工夫して話すことである。よって、本研究では話し方などの技術面ではなく、相手に目的とする行動意欲を喚起・向上させるために情報を精選し、構成を工夫して提示資料を作成することと、言葉を吟味して発表メモを作成することに焦点を絞った。

(4) 生徒に身に付けさせたい効果的に説明する力

本研究を通して身に付けさせたい力は、立場や考えの違いを踏まえて話す能力の中でも、特に相手に目的とする行動意欲を喚起・向上させるように、分かりやすく、印象的で、説得力のある説明をする力である。本研究ではそれを「効果的に説明する力」と呼ぶ。

しかし、効果的に説明する力が身に付いたかどうかを判断する明確な指標については、確定することができなかった。井上(2005)は、「説明力は、多視点から検討を行い、それらの克服によって能力化するものであることがよく分かる。一つの視点について克服すると、すぐにも上手になったり「決め手」があってそれにさえ気が付けば大丈夫だというようなことはないのである。」「従って、多視点による自己評価を行って、説明力を向上させる必要がある。」と述べ、「「分かりにくい説明」の表現」として142箇条を示し、その中から厳選して「『分かりにくい説明』の指導のポイント50位」にまとめている。分かりにくさに関してだけでも数多くのポイントがあり、それらが複合的に克服されることで分かりやすい表現になる。効果的に説明する力は、分かりやすさだけでなく印象的であるかなど、他の要素も含まれ、それらの重要性も相手や目的によって変わってくることから、明確な指標を確定することはできなかった。

よって、効果的に説明する力を付けるために、実際の授業でどのような活動をすることが有効であろうか、という点から考えて研究を進めた。

2 検証授業における指導の構想

(1) 活用の学習

1(1)で述べたように、プレゼンテーションの学習は、それまでの「話すこと・聞くこと」領域の学習の中で培われた力、身に付けてきた方法をどのように組み合わせ、使いこなして、いかに相手に目的とする行動意欲を喚起・向上させるかということが内容の中心である。つまり、新たな知識の習得ではなく、既存の知識・技能をどのように活用させるかが本研究におけるプレゼンテーション資料作成の学習の本質である。生徒にとって、活用の指針となる簡潔な判断規準が必要である。

(2) 簡潔な判断規準「あもじここ」の設定

プレゼンテーション資料作成のマニュアル本を渉猟したが、概ねどの書籍も同様に、大量のテクニックが網羅されてはいるものの、このとおりに実践したからといって絶対にうまくいくわけではないという旨が付記されていた。そこで、それらの大量のテクニックと、中学校学習指導要領国語、第2学年「話すこと・聞くこと」の目標である「目的や場面に応じ、社会生活にかかわることについて立場や考え方の違いを踏まえて話す能力」の内容を包括しつつ、授業で生徒が無理なく覚えることができ、実生活で活用しや

すいものとして、「あもじここ」という簡潔な判断規準を考えた。これは「相手」「目的」「情報」「構成」「言葉」の頭文字を並べたものであり、以下の内容を表すものである。

「あもじここ」（「相手と目的に応じた情報・構成・言葉」）

- ・相手に目的とする行動を促す情報の精選
- ・相手に目的とする行動を促す構成の工夫
- ・相手に目的とする行動を促す言葉の使用

この「あもじここ」における「言葉」という語には、提示する実物や提示資料のデザイン等を含むものとする。語呂として良いとは言えず、暗唱には不向きかもしれないが、相手意識と目的意識が基盤となっていることから、「相手」と「目的」の頭文字の「あ」と「も」を最初に配置し、後の三語「じ」「こ」「こ」は資料作成の基本的な作業順序に従って情報・構成・言葉の順に頭文字を並べた。

(3) 教科書で指導する際に懸念されること

「あもじここ」と同様の意味を示す内容は、教科書にも記載されているが重点化して記されていない。また、それまで学習してきた知識・技能とプレゼンテーションの例が記載されている。教科書で指導する際には、授業の進め方を工夫しないと、結果としては画像やキーワード等がきれいに配置された見栄えの良いプレゼンテーションの提示資料を作成することはできても、教科書に記載された知識・技能だけを用い、プレゼンテーションの例を模倣するだけで、プレゼンテーションをするために必要な効果的に説明する力は身に付きにくい。そのため、本研究の検証授業においては、手元において参考にできる例を見せずに、様々な知識・技能もあえて確認しないことにした。

(4) 指導の大まかな流れ

1(4)で示した井上の考えを参考にしたが、多視点による自己評価は、中学生、特に研究協力校の成績中位から下位の生徒には、時間的・能力的な点から厳しいと考えた。そこで、以下のように授業を進めれば、効果的に説明する力が育つのではないかと考えた。

- ① 「あもじここ」にのっとして、情報の収集、構成の工夫、言葉の使用の作業段階ごとに個人でプレゼンテーションの資料をまとめる。（工夫）
- ② 作業段階ごとに、グループ内で交流して、自分の工夫について他者からの評価を聞くとともに、他者の工夫とその意図を理解する。（交流1－工夫の評価と理解）
- ③ 作業段階ごとに出された意見の中から、グループ資料に採用するものを選択したり、より「あもじここ」にのっとなったものになるよう複数の意見を組み合わせたりするなど、グループで検討して資料を作成し、次の作業段階へ移っていく。（交流2－工夫の検討）

効果的に説明する力は、一度の授業で目に見えて上がるほど簡単なものではないと考える。上の作業のように、自分の工夫について他者からの評価を聞いたり、他者の工夫を参考にしたりしながら、「あもじここ」にのっとして自ら工夫を繰り返すこと、それを小学校からの話すことの学習の中で重ねていくことで、効果的に説明する力が育つと考える。効果的に伝わるように工夫を試みる態度も、効果的に説明する力の大きな要素の一つであると考えた。

(5) プレゼンテーションの場、内容、相手、目的について

プレゼンテーションの場として3学期に実施される学校説明会での5分間の説明を想定する。実際の発表の場を考慮し、4人1グループで、全6グループのグループ編成とする。内容によって、中学校生活、学習、行事の三つに2グループずつ振り分け、さらにその2グループを、相手によって新入生向けと、新入生の保護者向けに分ける。目的は各グループで詳しく設定させる。

(6) 「あもじここ」の内容と意義を理解させる指導の工夫

「あもじここ」の内容と意義を理解させるために、同じ内容ではあるが、「あもじここ」の判断規準にのっとして作成したものと、全く意識しないで作成した二つのプレゼンテーションを生徒に提示する。それを情報、構成、言葉の三つの観点から比較させる。

(7) 「あもじここ」にのっとした交流の活発化を促す指導の工夫

「あもじここ」にのっとした交流の活発化を促すために、2(4)で示した②、③の交流において、以下のようにスライドカード法を用いる。

- ・情報の精選…スライドカード（付箋）に情報の項目を書き、作業紙上で整理・精選する。
- ・構成の工夫…精選した情報を、話す順序に従い、進行表上に目に見える形で並び替える。

(8) 検証の方法

1(4)で述べたように、効果的に説明する力が付いたかどうかを判断する明確な指標は確定できなかった

た。よって、事前に設定した明確な指標による検証はできないが、以下の三つと、検証授業における生徒の活動の様子から、本研究の指導法の効果がどのようなものであったかを探ることにした。

- | |
|---|
| ① 教科書の学習の流れに沿って指導した学級と、本研究の指導法を実践した学級の提示資料と話された内容から、分かりやすく、印象的で、説得力を増そうとした工夫の数、内容を比較する。 |
| ② 事前と事後に、全国学力・学習状況調査で出題されたプレゼンテーションの資料についての問題を両学級に解かせ、その正答の伸び率を比較する。 |
| ③ 事後に、ある条件におけるプレゼンテーション資料作成のテストをし、それぞれの学級の生徒の作成した資料から、分かりやすく、印象的で、説得力を増そうとした工夫の数、内容を比較する。 |

検証授業では実際の発表の場を考慮し、4人グループが共同で一つのプレゼンテーションを作成することにしたため、①では個人の変容が確認できない。よって②、③で個人の変容を確認することにした。なお、②、③の事後テストは力が定着したかを確認するため、夏季休業をはさんで実施することにした。

3 検証授業

(1) 検証授業の対象及び実施期間

ア 対象：研究協力校（中学校） 第2学年A組（21名）、B組（22名）

本研究による指導法の効果をより明確に把握するため、A組にのみ本研究の指導法を実践する。B組は教科書の学習の流れに沿った指導をする。

イ 実施期間：平成25年7月1日～7月12日（10日間）

(2) 指導計画

ア 単元名 「印象に残る説明をしよう プレゼンテーションをする」

イ 単元の目標

プレゼンテーションの資料を分かりやすく、印象的で、説得力を増すよう工夫・交流しながら作成することを通して、効果的に説明する力を付ける。

（〔A 話すこと・聞くこと〕(1) イウ）

ウ 指導計画

	本研究の指導法を実践した学級（A組）	教科書の学習の流れに沿って指導した学級（B組）
一 次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 二つのプレゼンテーションを見て、どちらのモデルが分かりやすいかを判断し、内容を比較する。 ○ 相手と目的に応じた情報・構成・言葉（あもじここ）という判断規準にのっとって資料を工夫することの内容と意義を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科書p.50～51を読み、プレゼンテーションについて理解する。 ○ プレゼンテーションの相手と目的を確認する。
二 次	<ul style="list-style-type: none"> ○ プレゼンテーションの相手と目的を確認する。 ○ スライドカード法で情報の収集・整理・精選をする。 ○ スライドカード法で構成の工夫をする。 ○ スライド進行表に沿って、提示資料と発表メモを作成する。 ○ 発表練習、資料の再検討をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科書p52～53を読み、説明の内容、仕方について理解し、プレゼンテーション進行案を作る。 ○ プレゼンテーション進行案を交流し、グループのプレゼンテーション進行案を作成する。 ○ プレゼンテーション進行案に沿って提示資料と発表メモを作成する。 ○ 発表練習、資料の再検討をする。
三 次	<ul style="list-style-type: none"> ○ プレゼンテーションの発表をする。 ○ 各班の工夫について感想を述べ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ プレゼンテーションの発表をする。 ○ 各班の工夫について感想を述べ合う。

・プレゼンテーションのねらい、相手意識と目的意識についてはA、B共通して指導する。

(3) 二つのプレゼンテーションモデルの提示とその比較について

「あもじここ」の内容と意義について理解させるために、二つのプレゼンテーションモデルの提示とその比較を行う。本来の目的の他に、プレゼンテーションについて生徒に見通しをもたせると同時に、プレゼンテーションの活動自体に対する興味・喚起と、主体的な学習意欲の向上も効果として期待する。

プレゼンテーションの内容は、生徒が親しみやすいものとして、2学期に予定されている修学旅行で訪問する東京ディズニーランドについて2種類提示する。一方は「あもじここ」を全く意識しないもの、他方は東京ディズニーランドへの期待感をもたせ、実際に現地でより楽しい経験をさせることを目的に「あもじここ」の判断規準にのっとって作成したものである。

プレゼンテーションモデルを提示した後、どちらがより分かりやすく、東京ディズニーランドへの期待

を抱かせる説明であったかを、生徒に問う。その後、二つのプレゼンテーションのスライドの画像と説明原稿をまとめたものを配付し、二つを比較した上での特徴を問い、それをまとめる。最後に二つの違いは「あもじここ」の判断規準の有無であることを説明する。

(4) 簡潔な判断規準「あもじここ」の重点化について

判断規準として定着させるため、教室に「あもじここ」の掲示物を掲示し、第二時以降は導入時に暗唱させた上で、本日の学習内容を確認、説明する。確認、説明は「あもじここ」の内容に照らしながら行う。

(5) スライドカード法について

スライドカード法によって情報を視覚化しながら交流させる過程で個人の工夫の具体的なイメージを明確に伝え、「あもじここ」にのっとりた交流を促すことをねらいとする。



図1 情報の整理段階の作業紙

ア 情報の収集・整理・精選 (図1)

付箋に発表内容に関する情報を書かせ、作業紙に貼らせる。情報をグループごとに整理させながら、作業の中で思い付いた情報を追加させた上で5分間の発表時間に即して発表する情報を精選させる。

イ 構成の工夫 (図2)

精選された情報をグループごとに進行表に貼らせる。それを動かしながらより効果的に説明できるように話す順番を決定させる。その過程で新たに必要となった情報を付箋に書いて付け足したり、優先度の低い情報は削除したりするなど、情報の精選について再吟味することも奨励する。



図2 構成の工夫段階の進行表

4 検証結果について

(1) 提示資料 (スライド) と、発表メモを基に話された内容について

図3から図5は、新入生保護者を相手にした資料である。目的は、A組1班が「中学生の学習の心構えを知らせ、家庭で勉強への協力をしてもらおう」、B組1班が「中学生の学習について詳しく知らせ、不安を取り除く」、B組2班が「行事のことを知らせ、1年の見通しをもたせる」である。

<p>4. 中学生の家庭学習状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ★家庭学習が1日1ページあります。 ★家での学習時間 ★家庭学習の内容 	<p>最後は中学生の家庭学習状況です。ノルマとして家庭学習が1日1ページあります。家での学習学習時間は、多い人では2時間で少ない人では30分、平均すると1時間くらい勉強しています。集中して勉強できるような環境が必要となりますので、ご協力をお願いします。</p>
---	--

図3 A組1班の6枚目のスライドと、発表メモを基に話された内容

<p>各教科でやってあげばいいこと</p> <p>国語→朝読書をしっかりする</p> <p>社会→都道府県・県庁所在地を覚える</p> <p>英語→A~Zのアルファベットの書き方・発音のしかた</p> 	<p>次に各教科でやってあげばよいことです。まず国語。朝読書をしっかりとしましょう。これは国語の文章能力がつかます。社会は都道府県、県庁所在地を覚えましょう。これは社会の地理で必要です。英語です。AからZのアルファベットの書き方、発音の仕方を覚えましょう。単語の書き方、発音の仕方を簡単に覚えられます。</p>
--	---

図4 B組1班の6枚目のスライドと、発表メモを基に話された内容

<p>6月</p> 	<p>○中には野球部、バスケットボール部、陸上競技部、バドミントン部、吹奏楽部、卓球部があります。卓球部は、中体連団体戦で優勝しました。</p>
---	--

図5 B組2班の3枚目のスライドと、発表メモを基に話された内容

各組の特徴として、A組は図3のように相手意識と目的意識を強くもった説明が多く、相手の利益になる情報や、相手が聞きたいと思われる情報やアドバイスを、相手が受け入れやすい言葉で話している。B組は図4のように相手意識と目的意識がA組に比べて弱かったり、図5のように画像の説明に終始したりしているものが多く、適切さを欠き、実際に発表するには大幅な手直しを必要とするものが多い。

表1 工夫の内容ごとの、その工夫を施した各組のグループの数

	工夫の内容	A組	B組
分かりやすくする工夫	小学校との比較による説明	3	2
	実例画像を使った説明	4	5
	比喩を使った説明	2	0
	専門用語について補足説明	2	1
	実演	2	0
印象的にする工夫	相手に応じた言葉遣い	6	5
	相手に応じ引き付ける言葉遣い	3	1
	クイズなどの問いかけ	3	1
	キャッチフレーズの使用	6	2
	流行語の使用等の興味を引く工夫	3	1
	呼びかけ	5	2
説得力を増す工夫	具体例など根拠を挙げて説明	3	1
	目的に応じた情報	5	3
	相手に有益な情報	2	1
	相手の立場にたったアドバイス	4	1

表1は、スライドと話された内容から、分かりやすく、印象的で、説得力を増そうとした工夫であると判断できるものを全て拾い上げて類型化し、その工夫をしたグループの数を数えたものがある。総じてA組が作成したプレゼンテーション資料に、分かりやすく、印象的で、説得力を増そうとした工夫が多く見られ、その内容もより適切であった。

(2) 事前・事後テストについて（平成22年度全国学力・学習状況調査国語B²）

ア 各設問の出題趣旨（「平成二十二年度全国学力・学習状況調査解説資料中学校国語」より引用）

- 一 「資料の表現の仕方をとらえることができるかをみる。」
- 二 「文章から必要な情報を集め、資料に表れている工夫を自分の表現に役立てて書くことができるかをみる。」
- 三 「資料の提示の仕方を工夫し、その方法について具体的に説明することができるかどうかをみる。」

イ 設問ごとの正答率（表2）

表2 平成22年度全国学力・学習状況調査国語B² 設問ごとの正答率

	A組21名		B組21名		※青森県 (公立)	※全国 (公立)
	事前テスト	事後テスト	事前テスト	事後テスト		
一	71.4	81.0	81.0	81.0	79.6	78.5
二	76.2	85.7	76.2	81.0	84.0	81.8
三	42.9	66.7	47.6	61.9	48.7	45.6

- ・事前テストは6月26日に、事後テストは8月30日にA組、B組ともに実施。
- ・事前テスト後の、答え合わせや答案返却等はしていない。
- ・事前と事後テストの間に、検証授業以外に本問題に該当する部分の授業は実施していない。

この問題は、プレゼンテーションの資料に関する問題である。設問三のみ本研究と直接関わる内容である。t検定によると、A組の設問三の事前と事後テストの間にのみ有意差が見られた。 $(t(20) = -2.5, p < .05)$ これによって本研究の指導法により、資料の提示の仕方を工夫し、その方法について具体的に説明する力が定着したことが分かる。

また、有意差は見られなかったが、いずれの設問も事前テストでは、A組はB組や全国、青森県の平均に劣っていたが、事後テストではA組が高い伸びを見せて、B組や全国、青森県の平均に追いつき、追い越している。このことから本研究の指導法により、副次的にプレゼンテーションの資料を読む力も

付いてきているのではないかと考えられる。

(3) 事後テスト（自作問題）について

ア 問題の概要

中学校の教員の立場になって、修学旅行の事前説明会で、生徒に対して職員の打ち合わせで確認された内容を確実に理解させることを目的に、プレゼンテーションのスライドと発表原稿をまとめる。

イ 出題意図

伝えたい内容をスライドと発表原稿にまとめて、適切な言葉を使用できるかをみる。

ウ 結果

表3は、自作問題で回答したスライドと発表原稿において見られた工夫を全て拾い上げて類型化し、その工夫をした生徒の割合を示したものである。

表3 適切な資料の工夫をしていた生徒の割合（％）

	A組	B組
①スライドとして意味が通る	100.0	85.7
②スライドの字数を適切に少なくしている	66.7	66.7
③スライドに見出しを付けている	52.4	33.4
④箇条書きにまとめている	81.0	57.1
⑤※などの記号を使って印象的にする	33.3	19.0
⑥その他、効果的に説明する工夫をしている	28.6	0.0
⑦話し言葉として成立している	100.0	95.2
⑧敬語を使用している	100.0	90.5
⑨情報を補って分かりやすくしている	23.8	9.5
⑩総合的に過不足無い説明となっている	100.0	85.7

・ 8月30日にA組、B組ともに実施。

「スライドの字数を適切に少なくしている」の項目だけが同数で、それ以外は全てA組の生徒の方が適切な工夫を加えていた割合が高かった。それぞれ工夫をしていれば1点として点数化し、 t 検定を行ったところ、A組とB組の結果には有意差が見られた。 $(t(40) = 2.026101, p < .05)$ によって、本研究の指導法により、プレゼンテーションの資料に適切な工夫をする力が身に付いたことが分かる。また、①、⑦、⑩の結果から、A組の生徒全員が、意味の通じる説明ができたと言える。

さらに、割合は少ないが、⑥と⑨の工夫の内容は、相手や目的を非常に強く意識して伝えようとするものであり、想定していた工夫を上回るものであった。効果的に説明する力が高いレベルで付いてきている生徒がいることが分かった。

(4) 授業におけるA組の生徒の活動の様子について（B組に比べ相対的に見られた特徴）

表4は各学習場面において、B組の生徒に比べ相対的にA組の生徒に見られた活動の様子をまとめたものである。

表4 各学習場面のB組に比べ相対的にA組に見られた生徒の活動の様子

情報の収集	数多くの情報が出た。
情報の精選	多くの情報が出たため、話合いに時間がかかった。
構成の工夫	多くのパターンに対しての検討が行われた。 話合いの中で、情報の精選についての再吟味が行われた。
言葉の使用	イメージを共有して自分の担当以外の箇所にも考えをもっているため、検討で多くの意見が出た。
発表練習	互いにアドバイスをする姿が多く見られた。
発表	話し方の工夫や、傾聴的に聞く姿が多く見られた。
分かち合い	一人一人が出す意見の数が多かった。 短所の指摘は少なく、工夫の良さをあげる内容が多かった。

全ての学習場面において、A組の生徒に、より望ましい活動の様子が見られた。

5 考察

(1) 主体的な学習意欲

表4などに見られるように、授業における生徒の活動の様子から、A組の生徒の学習意欲の高さが感じられ、その違いは著しいものであった。これは第一にプレゼンテーションモデルの提示によって活動の見通しが立ったことと、このような楽しい説明をしてみたいと言語活動自体に対する興味や関心が喚起されたことによるものと考えられる。第二に簡潔な判断規準を設定したことによって、生徒がその規準を容易に理解し、常に意識することで、スライドを作成することだけにとらわれることなく、既習の知識や技能を取捨選択しながら、主体的に思考する態度が身に付いたためであると考えられる。B組はプレゼンテーションの言語活動に対してのイメージを捉えきれずに、先行き不透明で作成していた様子がかげえ、発表したプレゼンテーションも画像の説明に終始するなど、内容に乏しいものであった。

(2) 効果的に説明するために工夫をしようとする態度

提示資料と話された内容や自作問題の事後テストの結果から、A組の生徒がより効果的に説明するための工夫をしようとする態度が育っていることが明らかになった。これは簡潔な判断規準の設定により、誰もが主体的に考えて工夫することができた自信と、スライドカード法によるグループ内交流で、全ての生徒の考えに評価がなされ、グループで出された全ての考えと評価をグループで共有できたことで、効果的に説明するための方法を身に付けたことによるものと思われる。

(3) 立場や考えの違いを踏まえて話す能力

全ての検証資料の結果から、本研究の指導法によって、より高い学習意欲をもって、立場や考えが異なる相手に効果的に説明することができるように意図的に多様で適切な工夫をしながら、プレゼンテーション資料を作成し、自分の考えを理解してもらえるように話すことができることが確認された。よって、立場や相手の違いを踏まえて話す能力が育成されたと考える。

V 研究のまとめ

プレゼンテーションモデルの提示により言語活動に対する主体的な学習意欲が喚起され、簡潔な判断規準の「あもじここ」の内容と意義が容易に生徒に理解された。また、「あもじここ」の理解によって生徒の主体的な思考が促され、効果的に工夫をしようとする態度が育成された。そしてスライドカード法による「あもじここ」ののりつたグループ内交流と検討によって、分かりやすく、印象的で、説得力のある資料を作成して説明することができた。これらのことから、簡潔な判断規準を理解させ、それにのりつた工夫と交流を通じた資料作成が、立場や考えの違いを踏まえて話す能力の育成に有効であることが明らかになった。

VI 本研究における課題

- ・「効果的に説明する力」が身に付いたかどうかを判断する明確な指標を確定することができず、検証資料から研究の指導法の効果を探っていく検証方法をとった。よりよい検証の方法があったのではないかと自問している。実際の授業を通して、よりよく判断できるものがないか追究していきたい。
- ・判断規準「あもじここ」は、プレゼンテーション以外の言語活動においても活用が可能であると考えられる。効果的に説明する力は、自ら工夫を繰り返していくことで育成されると述べたが、他の言語活動の授業においても、本研究の指導法を生かした指導法を模索し、系統的な学習を展開していきたい。

(引用文献)

- 1 堀裕嗣・研究集団ことのは 2002 『総合的学習を支え活かす国語科2 教室プレゼンテーション20の技術』, p. 28, p. 30, 明治図書出版
- 2 井上一郎 2005 『誰もがつけたい説明力』, p. 30, p. 48, 明治図書出版
- 3 国立教育政策研究所 2012 「平成二十二年度全国学力・学習状況調査 解説資料 中学校国語」, pp. 54-55

(参考文献)

- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 国語編(平成20年9月)』
光村図書 2012 『国語2』